
モグラ

mimoz.k.withberry

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モグラ

【コード】

N3307X

【作者名】

mimoz.k.withberry

【あらすじ】

ある男の私生活。平凡に見える彼の心の闇を垣間見る。

暗闇の生活

目を開けると、いつもの壁と右脚の爪先と半開きのカーテンが目に入った。

もう、朝か。

何かの切っ掛けで目が覚めた。耳を突く大きな音を認識する。ああ、携帯のアラームか。

手探りで携帯を探し出し、アラームを止めて投げ捨てる。

また布団に手を突っ込んでうずくまる。

まだ頭が冴えていない。さっきまで見ていた夢が思い出せない。

小学生の時だったような…

猫と蛙が出てきた気がする…

うう。また携帯のアラームだ。もう30分たったのか。

起きなきゃ。仕事か。

…ぼーっとした頭のまま起き上がりさっき投げ捨てた携帯をまた手探りで探し出し、手に取る。

仕事に行く為には、とりあえず眼鏡はどこだろう。

眼鏡を探し出し煙草に火を付ける。

特に気になる訳ではないが、maierチェック。
いや、気にしている。

誰しも不安だろう。私と言う人間が昨日まで存在していたのか。
私は携帯の履歴と記憶を記し合わせて存在を確認している。

恐らく昨日も私は存在していたのだろう。

なぜか安心する。

シャツにアイロンかけなきゃ。

いや、もうこんな時間だ。ノンアイロンのシャツが先週から干しっぱなしだし、今日はあれでいいや。

とりあえず服を脱ぎ捨てシャワーを浴びる。

こんな時独り暮らしは気楽だ。

裸で部屋をウロついても誰にも何も気遣わなくていい。

昨日までに脱ぎ散らかした服。

弁当とカップラーメンのごみは、買ってきたコンビニの袋にまた入り直して異臭を放つ。

こいつらを溜め息尽きながら掻き分けて、前進。

シャワーを浴びる。寝起き特有の匂いと気になる頭皮の脂を洗い流す。リンスは素晴らしい。

旋毛にボリューム出るんだ。

はあ。

気付いたらまた時間泥棒にあつた。もうこんな時間。ちょっとした焦りを感じつつ、煙草に火を付け携帯を手に dial する。

「五分だけ付き合つて」そんな適当な御前立てをして煙草が尽きるまで話す。

TVは常についている。

デジタルな音声を聞き流しながら彼女と話す。

いつ、何が切つ掛けたらろうか。彼女と知り合ったのは。

彼女の本当の名前は知らない。

彼女の本当の顔も知らない。

彼女が本当は何者なのか知らない。

私と彼女はどの様な関係なのか、知らない。

だから、素直な自分を出せるんだ。虚勢を張らずに済む。笑いを取る必要もない。有りのままの私で居られる。

他愛もない夢と愚痴を並べ自嘲して笑い、彼女の笑い声を聴きくとなぜか安心。

煙草を揉み消す。電話を切りたくない。
胸が痛い。

「じゃあ、用意するね。付き合ってくれてありがと。」

彼女は微かに笑いながら頑張つて、と言って切った。

少しだけ心が落ち着いた。

さて、とパンの袋を開けて頬張りながらコンタクトを入れ髪を適当に固めて着替える。

このスーツもそろそろ替え時かな。スーツなんて消費物だ。そう考えながらジャケットを畳んで鞆に詰め込む。

質の良いもの買ったところで何になるんだか。
何の思い入れもない。ただの仕事着だ。

以て半年が良いとこだ。
数年持ち越すなんて有り得ない。

ヤバイ、もう行かなきゃヤバイ。

この歳で遅刻なんてみっともない処じゃない。

あ、ごみの収集日だった…

でももうだめだ。今日は諦めよう。次の収集日にまとめて出せば大丈夫だ。

苛立つな。

外に出る前に一度溜め息を尽く。

変な日課だけど、これでやっと仕事に行ける。

鍵を掛けて、ちゃんと掛かったか一度引いて確認する。

ドンツと鍵の抵抗が身体に響く。

外はやけに眩しくて目が痛い。目線の高さを見ているだけで精一杯だ。

空気が湿って息苦しい。胸ポケットから煙草を出し、火を付ける。

少しだけ足早にいつもの路地を曲がる。

横断歩道では丁度青信号に変わった。

今日は信号に好かれてるな。

それだけで少し気分が良い。

メトロはいつものように遅れている。

毎日同じ様な謝罪アナウンスが流れる。

遅延の内容は似たり寄ったりだ。

くそっ、でも会社には間に合いそうだ。

特快を見送り、各停を待つ。何て事ない。ほんの2、3分だ。

苛立つ。

何で毎日こうなんだ。学習能力がないのか。日本の交通機関は常に時間厳守を努力すべきだろう。

謝罪してる暇があったらメトロ走らせる。

階段に一番近い乗降口で降りてまた早足で改札に向かう。

会社の連中が居るから遅刻しそうだと焦っている事を悟られ陰で笑われるのは嫌だし、そう言う噂が好きなヤツラの標的にはなりたくない。

だからと言って悠々と歩いて居ては遅刻してしまう時間だ。颯爽を装い素早く歩くんだ。

前にヤツラを放って置いたら変な噂立てられた。

大人気ないと分かって居たが苛立って殴り会いになった。なぜ私が殴られたのかは不明だがソウイウヤツラが会社に蔓延り根を生やし棲息して居ることは確かだ。

だからなるべく自立たずに、目に付かない様に、毎日を作り過ごさなくてはいけない。

彼女に言わせると「メンドウナコト」だそうだ。

メンドウナコトって、なんだよ。

私には難題且つ重大な事論だ。

彼女は私にとって唯一心安らぐ存在だから、彼女の全てを受け入れ

る準備はある。

だからこそその「メンドクサイ」がどうしても気になるんだ。

とにかく、とにかく急いでいない振りをして急いでビルに向かう。

そのまま流れで階段を昇り、椅子を引いて鞆を置いてタイムカードを押し。

慣れた物だ。神業とでも言って自分を讃えたい。

暗闇の生活

会社での私は俗に言う歯車だ。

歯痒い言い方だが間違いない。

罵倒され酷い扱いを受けた事もある。

突然の辞令により行きたくもない大都会に引つ張り出された。

何だよ何なんだよと、愚痴を言う相手も電話の先。

この街に私の味方は居るのだろうか。

何がどうしてどうすれば良いのか何をやる仕事なのかも分からず言われるがままにパソコンを操作して覚えた。

室内に籠りきりになってがむしゃらに与えられた仕事を教えられた通りにこなし、こなしでは報告し、次の指示を煽ってまたその通りにこなし、こなしでは報告し、次の指示を煽ぐ。

家に帰ると憔悴しきって意識を失うように眠った。

異動してからの数週間、周りの人間に見付からない様に与えられた仕事を遂行し続けた。

会社のミスを穴埋めをし続けた。

毎日毎日毎日毎日私は姿を隠し見付からない様に与えられた仕事を

遂行し続けた。

思いもよらず、結果が過大評価になって返ってきた。

有難い話だが頭の中まで憔悴しきった私にはそれさえよく分からなかった。

上司や先輩を見て反面教師的に色んな事を学んだ。

何をすると罵声が飛ぶのか。

何をすると罵倒されるのか。

何をすると陰口を言われるのか。

何をすると認められないのか。

何をすると駄目のレッテルを貼られるのか。

私は何を求められているのか。

責任を押し付けられ、私の名前の認印を捺した書類が出回り誰かが難癖付けて来たら太刀打ちする。

毎日が闘いで必死にもがいていた。

仲間はいない。落としあい。

だれか落ちれば自分が上がる。

ただ、それだけ。

私は疲れた。それさえも感じられなくなるくらい、疲れた。

とにかく眠れなかった。

独りの夜は眠らない。眠れない。朝になると頭が重い。

布団から起き上がるつもりでも目が回ってどこに天井があるのかわからない。

やっとの思いで這い出し、ドアノブを相手に立ち上がろうと格闘した。

部屋の中で何度も転び全身に痣ができた。衣服では隠しきれない処にまで痣ができた。

とにかくこの街で私が持っているのは仕事だ。それしかない。頼れるのも会社しかない。

でも、身体が動かない。顔を上げられない。

鏡さえ見れない。

暗闇の生活

何とか過ごしている。

相変わらず体調は優れない。

しかし仕方ない。仕事には行かなきゃ。

会社では平然を装い家に帰るとぐったりの毎日。

冴えない日が増えてきた。

布団から起き上がれず携帯を探しに這いずり回ってそのまま会社に電話して休む事を告げ、そのまま眠った。

それでも、多少の具合の悪さには身体が慣れ、1週間も経つと会社にはほぼ毎日通えるようになっていた。

独り部屋に居ると、頭を抱えて何かを考えて落ち込むようになってきた。だんだん身体がおかしくなっていく事を痛感する。

平然と、眈々と、仕事をこなす事に専念したが、具合の優れない時は半日休憩室で寝ていた。

ある日、目眩が酷く耳鳴りも酷い。1日休んだがまだ駄目だ。

昼頃には目が開けられるようになった。近くのコンビニに買い物に行ける。夜は相変わらず眠れないのだがそれは平気だ。

休みが2日目に突入。起き上がれない。時間的にはしっかり起きた

ものの、アラームが遠くに聴こえた様な気がした。

そのまま土日を挟んで4日間やはり不眠のため寝むれず朝は具合が優れず、気分は改善しない。

それでもさすがに今日は休む訳にはいかない。休憩室で寝る事も許されないだろうな。

耳鳴りのせいだろうか、耳が聴こえにくくなってきた気がする。

先輩に相談してみようか。直属の上司に相談しても小言を言われるのがオチだろ。

とにかく近くの病院にまず行ってみた。

目眩が酷いんです。

耳鳴りも酷いんです。

頭が重たいんです。

会社にいるのが辛いんです。

平衡感覚がおかしいのか、まっすぐ歩けないんです。

夜眠れないんです。

起き上がれないんです。

話していくと今まで慣れてしまってた平気になっていた事が本当は普通の事ではなかったのか、と気が付く。

暗闇の生活

秋晴れの爽やかな朝に私はなんとも憂鬱な気持ちを掻き消せないままでシャワーを浴びた。

新たな世界に足を踏み入れ様としている様な気持ちだ。

先日の内科での診療は特別な物ではなかった。お仕事でお疲れなんですかね、皆さんにご紹介してるんですよ土日も診療してるんでお仕事に差し支えが少ないかと…と一枚の紙をもらった。

診療内科クリニック。

何だって、心の病気ってやつか。それで解決したなんて言わせないぞ。お前の技量では此処までなんで後はお任せって事が。

投げ出されたのか。はっきり言ってみれば良い。はい、あなた鬱病です。この目眩はどっから来てんだよ。目眩も鬱か。

心の中ではそう罵倒しながら、信用もせずにとりあえず予約の電話した。土日のどちらか、という事は指定出来たが、日にちと時間は指定出来なかった。初回の診療が今日の10時からという事だ。土曜日くらい午後まで寝ていたかったな。まあ手応えでも観てやろう。

そんな事を考えながらいつもとは違う駅に向かう。

最寄り駅に着き、地図を片手に場所を確認に向かう。20分も前に

着いてしまった。半端な時間をもて余す程嫌な事はない。

煙草を二本吸い時計を眺め、そろそろ受付くらいは開いてるだろう。エレベーターに乗り釦を押した。狭く苦しくて暗くて重圧な雲の下に居るみたいだ。何だか嫌な感じ。エレベーターさえ私を歓迎しない、って考えすぎか。自嘲。

その薄汚い箱を降りると何とも驚いた。此処が本当にオフィス街の一部のなんだろうか。傘立てさえインテリアみたいな所謂ヨーロッパ調なのかどつかのお洒落な外国みたいな雰囲気。そう言う知識の無い人間だからどうも描写が出来ないが、異空間にでも招待された気持ちになった。さらに場違いな変な焦りが心を過る。

あ、すみません、予約した者ですが…

産まれて初めてカウンセリングという奴を受けた。最初は小馬鹿にでもされるのかと思っていたら、思いがけず親身な振りして理解をしている様な態度を見せられた。実際どうだったのか分からないが。

先日の内科で話した内容と、その後考え付いた症状。1日の気分の波。仕事に対する不満感。何故か感じ続ける不安。

話すだけで大方救われた気がした。人の顔をしっかりと見て話したのも、こんなに流暢に言葉が出てくるのも、久しぶりだな。

カウンセリングというのは30分位続いた。でもまだ話して居られそうだな。

終わったら今度は診療だとの事。15分程待って名前を呼ばれた。

初めまして。診療内科って言うのは初めてなんですよ。カウンセリングを受けたのも初めてですか。そうですね、如何でしたか。さつきカウンセリングでお話し頂いた事を読ませてもらったんですけど、今一番辛い事は何ですか。そうですね、体調がずっと優れないんです。眠れないって言うのはいつからですか。あーじゃあ眠れなくてまた朝を迎えて頭が重たいままお仕事してまた夜は眠れなくてーって言う悪循環みたいになってるんですかね。そうですね、うーん。それは辛いですよ。ほとんど寝てないんですよ。食欲もない…ですか。うん。それじゃあお仕事だとか何かに対する意欲も出ない…ですよ。

まあ簡単に鬱病って言うといけないんですけど、症状としてはきつとお疲れから来る不安感だとかーそれが悪循環にハマっちゃってーで、心と身体が疲れちゃったんじゃないかなあ。

今日はちょっと気分を落ち着かせてくれるお薬と、ゆっくり眠れる様に眠くなるお薬を出しますね。お薬は飲み心地が悪かったり身体に合わなかったら調節していきますから、次回飲み心地教えて下さいね、うん。気持ちのお薬は眠気が出る事が良くあるんでどうしてもお仕事の妨げになる様なら教えて下さいねー。

あと、目眩とかの方はハッキリとした事は言えないんですね。ストレスからとか脳神経とか、ちょっと身体が疲れちゃってる期間が長かったので影響が出ているのかも知れないのでねー。そこはちゃんと専門の病院にかかった方が良いかなー。

結局家に帰ったのはもう16時頃になっていた。

まあまあだったかな。と満足感を隠す自分がいた。毎食後の薬を飲

んで布団に身を放り投げた。

「あ、もしもし。大丈夫かな。」いつもの他愛のない当たり障りのない話。愚痴も社会への不満も変わらず語る。

そう。

ふふっ何か今日はご機嫌じゃない？

そうかな。そうだ、この前TVで見た映像なんだけどさあ、水族館のアザラシが可愛いとか言いながらさあ、餌は海産物でさあ、ちよつとグロいよね。すっごいエグいって思ったんだけど皆で可愛い可愛いって言ってさあ……

気分が良い気がする。

暗闇の生活

年を越して、この大都會にも雪が降る季節になった。病院へ通う様になってしばらくたった。

定期的に、月2回。毎度薬を強くしてもらい、満足して帰る。

薬のお陰で、眠れる様にはなった。相変わらず月曜は憂鬱だが、木曜までは順調に通えるようになってきた。金曜が憂鬱で土日はたっぷり寝て、また次の週。

同じ様に過ごし水曜の夜から憂鬱が始まり金曜の夜には完全に薬が効かなくなる。そうして土曜に病院へ行く。

何だか最初は馬鹿にしていたが、薬があると落ち着く。何かに頼るのは弱い奴だと思っていたが、それは世界が狭いだけだ。

こんなに爽やかな気分になれるのに。

「あ、今大丈夫かな。昨日仕事でさあ……」

「ああ、ごめん。少し付き合ってくれるかな。」

彼女は相変わらず私の世界に輝きをくれる。会った事もない彼女だが、今は居なければならぬ存在だ。とっても会ってみたくなくて何度かその話をした。

そうね、今度会ってみましようか。
遠いから、時間がかかるからね！。

あ、今度の三連休は予定があるの。

何度も断られた。その度に少し胸が苦しくなつて、でも軽い気持ちで受け流したそうしなくてはいけない気がした。

それでも私には彼女しかいないし彼女にも私だけを見ていて欲しいと思う様になつていた。

だから無理に会おうとして嫌われるのは避けたい。だから彼女に浸透していつて自然と彼女に受け入れられたいという目論みだ。

そろそろ結婚だつて地元じゃあ遅過ぎるくらいの歳だし、彼女の見てくれが酷い物でもそんなの関係ない。

ああ、楽しみだなあ。二人で過ごす毎日。彼女の幸せの為なら仕事も場所も選ばない。

楽しみだなあ。

一緒に旅行とか、楽しんでくれるんだろうなあ。

相変わらずの耳の障害は消えず、左耳は触っても感覚が無くなつて変な感じだ。

ちよつとおかしい所もあるし薬が増える事に喜びを覚えるし、世界から切り離されて生活していたいと考えながらも妙に気分が良い日は普段は話さ無い様なヤツラと飲みに出掛けたりする。

ちよつと変わった所のある普通の人、だ。

雲は間隔を狭めて空を走り、つい最近まであんなに近かったのに随分遠い所に離れて行ってしまった。

これからどこまで遠くに行ってしまうんだろう。

1日の薬の量は限界を越えていた。

薬物の依存傾向が見られますね、これ以上薬を増やしたり強くしたりしない方が賢明ですね。

飲み方を変えて対処してみましよう。

今の薬ではもう眠れなくなっているのに。

でも、そうなのか。確かに、薬の量が多いと思う。それが嬉しくなっていたのも、どんどん強くして欲しいと願って本来の薬の効果と向き合っていなかったかもしれない。

でも、先生はもう私の味方じゃないのか…。

少し幻滅した。

私を理解してくれている極少数の人物の一人だと思っていたが、違ったのかもしれない。

疲れるけど、色んな事を考えながら土曜を過ごした。

暗闇の生活

また雪が舞う季節になった。

私はあれ以来あの病院には行っていない。

幾つかの病院を渡り歩き、薬の量が限界だと言われたらまた次の病院を探した。

暮らしていたマンションの近所も、よく使う私鉄の沿線も、会社の近くも制覇した。

結局病院を探すのにも疲れてしまって他に何か不安を解消出来るものは無いかを貪り這えずり廻って強欲に求め続けた。

心地の良い物を求めて危険そうな場所にも近寄ったが、軽く覗いただけで足を踏み入れる勇氣はなかった。

苛立ちが募り煙草の量が増えたり、何もしたくなくて逆に減ったり。

普段は呑めないアルコールに溺れ、独りで呑み更けて急性アルコール中毒を1週間引きずったり。

普通の人間の4倍程の食事をした。胃が広がり過ぎて背中の方まで身体がパンパンに張り詰めて身動きが取れなくなった所で思いつきり吐く。

食事が一番スッキリするのだが、吐いた後は口も歯も手も荒れ放題になり頭痛も酷くなる。

桁違いの買物をして発散しようとしても何を買えば良いのかわからない。適当にブランド物を買って見たが我ながらセンスがなく、必要そうな物は無い。借金取りに会社にまで押し掛けられ、親に頭を下げた。

数日会社を休んで寝込む事が増えた頃、仕事も手につく訳がなく、上司にも促され先月辞めた。

この歳で、独り身で、無職で、顔も頭もいい訳ではない。しかも自覚するくらい病んでいる。

引越しの荷物と共に借金を肩代わりしてくれた実家に転がり込んだ。

親って奴はおかしなもので、散々迷惑掛けて勝手ばかりしてるくに連絡も入れず感謝の意も示した事もない私を、流石に小言を少し言われはしたものの、受け入れてくれた。

何もする気にならず、ただ家は禁煙だった故に1日に2、3度家を出て煙草を吸った。

行く所と言えばコンビニか薬局くらい。

片田舎の都市近郊で、特に不自由はない。なんならネットで何でも買える。

「もしもし、ちょっと話があるんだけど、今月のいつでもいい、どこまででも行くから会って下さい。」

彼女は困った声を出したが観念しましたとも言つようにいつもの微かな笑みを含んだ声で、じゃあ勝手に決めるね。

と言った。彼女と連絡をとる様になって2年越しの快拳だった。

北だろつが南だろつが海の上でも空中でも行つてやる。

暗闇の生活

夜も更けた午前3時。眠りの浅い私の元に見覚えのある番号から電話がかかってきた。

でも、かかってくるのは初めてだった。いつも私の都合で電話をして付き合ってもらっていた。

彼女専用の着メが初めて流れた。

戸惑いながら、急いで電話をとった。

「こんばんは。今、大丈夫？」

先日彼女に懇願して会う約束を取り付け、向こうの都合に合わせて言うてから何度も、いつが良い？次の土日は？場所はどこが良いかな？

顔を伺いながら絶対に逃す気はないという気迫めいたものを漂わせた。

その結果がやっと報われる日が来た。

来週、木曜日、渋谷、CDショップ前、15時、暗い茶髪のロング、白い鞆、コーヒーを持っている…

と、彼女の言葉を追う様にメモを取っていった。

わ、わかったよ、ん？ああ、大丈夫。

私はあなたの為ならなんだってする。どこにだって行く。そう決めたのだから。

必要最低限の荷物を持ち、月曜日に東京に向かった。

以前勤めていた会社を避けるように数日ふらついた。観光しようにも何年も嫌々住んでいた街だ。私には似合わない。

ホテルで携帯をいじりながら音楽を聴いて読書に更けた。

水曜日にはもうする事もなくなって、気の進まない外出をして本屋に出掛けた。

久しぶりの東京は本当に便利な所だと感心する。

ただ、住んだり観光を楽しむ所じゃないな。仕事する所だ。皆の目的もきつとそれだけだ。

なんて寂しい街なんだろう。

一冊の本を買った。そのままコーヒーショップに入って表紙を開いた。

モグラ。やけに長ったらしい鬱病の男の物語だった。

本を買った事はを多少後悔しながら小一時間程読みふけり、社会が一斉に終業する時間を前にホテルに帰った。

あしたは彼女と会うんだ。

ホテルのランドリーに、明日用に選んだキメすぎない緩すぎない、好青年を演じられる服を取りに行った。

暗闇の生活

見てすぐわかった。彼女は寂しげな佇まいの、希に見る美女だった。遠くから近づいた私に、向こうもすぐに気がついた。その微笑みを見た瞬間、私は結婚を決めたのだった。

歩きながら話した。公園への遊歩道を歩く頃には私の完璧な手回しにより彼女の信用を勝ち得た事を確信した。

やっぱり、思った通りだった。

彼女はそう言う时下を向いて微笑んだ。

「え、あ、印象とか？あ、容姿とかそう言うの？それは許してよね、今日は目一杯お洒落してるんだから。」

靴擦れがそれを物語っては居たものの、それを口にはしなかった。

ううん。雰囲気って言うのかな。相性かな。第六感的な事。

彼女の言う言葉をよく理解は出来なかったのだけど、でも好印象という意味に捉えておいた。

コーヒーを飲みながら煙草の話をして、雰囲気が少しずつ和らいでいった。

デイナーは調べておいた小洒落たイタリアンの店に入った。久しぶりに酒を飲んだ。

元々アルコールには弱い方で、更に睡眠薬を処方しているが為此一年間は酒を一滴も飲んでいなかった。

話は大きく弾み、彼女の笑顔を見る度に胸が締め付けられる様になった。

食事を終え、外に出ると風が冷たかった。

コンビニで酎ハイを4本買って私の泊まっているビジネスホテルに入った。

そこから朝まではあまり記憶にない。

とにかく夢中だった。

酔った身体のまま夢中で彼女を求め、彼女を自分の物にしたい気持ちで一杯だった。

彼女はされるがままに身体を許してくれた。

指も、内腿も、くびれた腰も、脇も、手に余るお尻も、形の良い胸も、膝の後ろも、二の腕も、首筋からうなじも、耳たぶも…

私の物にしたかったんだ。

私の物にしたかったんだ。

私は下半身突き動かしながら彼女に迫った。

結婚しよう。

君以外考えられない。

彼女の身体をいつそう強く握り締めた。

彼女は声を上げながら、私に動かされながら、聞こえない振りをしていた。

私はその晩、何度も何度も彼女の中に迷子を放った。

結婚しよう。その言葉は彼女に届いていたのだろうか。

私は産まれて初めて本気で彼女を抱いた。

明け方、やっと気も済んできて、彼女を抱き締めたまま腕枕をして眠った。

数年ぶりに薬なしで、安らかに眠った。

暗闇の生活

「ゆき」

窓の外を初雪が舞うのを見ながら、彼女が口にした、彼女の名前だった。

それが嘘なのか本当だったのか、私にはわからない。

この世は嘘の塊でしかないと思うのです。

私自身きちんとこの世に生きているのかが、すでに危ういのです。

あの日からゆきとは連絡が取れなくなりました。

何度も何度も繰り返し電話をしました。

メールも送りました。

GPSも拒否されたのでPCで浸入ウイルスを入手し特定の位置情報を取得し訪ねても行きました。

苛立ちを隠しながらゆきが働く洋品店の外で仕事が終わるのを待ち、出てきた所で問い詰めました。

ごめんなさい。忙しくて。

そのままゆきは走り出しました。

微かに叫びながら走って行きました。

微笑みを浮かべている様にも見えませんでした。

追いかけてましたがゆきが電車に駆け込んだ所で逃しました。

ホームに立ち尽くす私を、ゆきは息を整えながら向こうを見ていました。

その電車を見送り、次の電車に乗りました。

幾つかの特定の位置情報を持っていましたから、全てに張り込み、その度にゆきは逃げて行きました。

一度警察に職務質問されました。

知らない男に殴られもしました。

私も怖くなって、地元に戻りまた連絡を取ろうと試み続けました。

ゆきは返事をくれません。

ずっと繋がらない状態が続き、それでも繰り返し電話をしていたらある日を境に全くの手段を失いました。

ゆきは携帯を換えた様です。

家も職場も変えた様です。

ゆきと出逢った経緯は随分前から不明でしたので、とにかくあの大

都会を歩き回りました。

彼女の言葉の節々を想い出しながら、彼女と待ち合わせた渋谷を中心に北へ南へ東へ西へ。

県を跨ぎ電車を乗り継ぎ駅間を歩き、あらゆる店を覗き込みオフィス街の昼食時間には町中走り回り、それでもゆきの姿は見つけられませんでした。

もしかしたらゆきも地元に戻ったのかも知れない。

わからない。私はゆきの何もかもを知らないのだから。

大声で叫びながら高架下の暗がりを通っている所を、複数人の警察官に押さえ込まれた。力強く押さえ付けられたのでアスファルトと一体になる様な気がして震える程の不安を覚えた。

暗闇の生活

疲れました。

私の心は枯れ果てて数年間、痴呆の様な生活を続けて来ました。

地元に戻り、親に罵倒されながら僅かな給与を貰える仕事に就きました。

人とあまり接触しなくて済む仕事です。

親を看取り、家は私の独房と化しました。

桜が舞い散るのに苛立ちを覚え、緑が茂る夏に頭を痛め、紅葉の絨毯を申し訳なく想いながら眺め、また雪が舞い降る季節にはもう土下座でもし続けている様な気持ちで一杯でした。

生きていてごめんなさい。

生きていてごめんなさい。

生きていてごめんなさい。

産まれた事を呪います。

生きていてごめんなさい。

ここは私の住む世界ではありません。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

そう思う度に私は荒れ果てた庭に出ては年中日陰の湿った場所を選び、土の上に俯せで寝転がるのでした。

それが唯一、私の休まる時でした。

一日、二日、続けている内にこれが私なのだと思ってきました。

なんて事はない。

ただ寝転がるだけで地球と一体になる様な、寛大な世界に生きている実感が沸くのです。

雪が積もるとそこを掘り、草を覗かせて毛布にくるまって眠りました。

仕事に行く事が少なくなり、無断欠勤を繰り返して、1ヶ月でクビになりました。

それでも、ある程度の遺産がありましたので、それを切り崩して多種の税金を払っていききました。

だんだんと草の上での生活が私の心に染み着いて、また申し訳ない気持ちになってきました。

ある寒い夜に私は独り、鉄のスコップを持って庭に出ました。

いつもの寝床の草を根こそぎ取り除き、そこに長年隠れていた土を掘り起こしました。

俯せに寝転んでみるとどうした訳か、また安心感に包まれるのでした。

新しい寝床でまた2ヶ月程過ごしました。

大地が私を包んでくれる温かさ。

昔母が読んでくれた絵本の様な。

少しずつ掘り進みました。

湿った土は少し硬く、寝転ぶ広さもだんだんと狭めて、身体を丸めるようにして1日中眠り続ける日々を送っていました。

たまに家に戻ると、訳の分からない請求書とダイレクトメールと新聞の束をまとめてごみ袋に突っ込み、腹も減らないのに賞味期限の切れた缶詰めを開けて少し食べてやっぱりいららない、と思い放置するのでした。

部屋の中はそんな缶詰めに虫が集り、前に突っ込んだ紙の束のごみ袋が山積みになって、電気もガスも水も止まった状態です。

唯一父の書斎は綺麗だったのですが、それは私が近づく事を懸念していたから、という理由があるからでした。

思春期に、父の書斎で厭らしい雑誌を発見した事があったからです。

何と無く父はそんな印象が無かったので、どうしてもその悪い印象を片付けられないまま今日を生きています。

そんな嫌な想いを感じると、またすぐに土の上に戻るのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3307x/>

モグラ

2011年10月24日13時59分発行